

ローマ・ヒューマニズムの成立

小林 雅夫

はじめに

ヨーロッパのヒューマニズムの起源は古典ギリシアに、更にホメロスに代表される英雄時代まで溯ります。しかし、哲学者ハイデガー(Heidegger)もかれの著書『ヒューマニズムとは何か』の中で述べているように、ヒューマニズムはローマ世界に成立しました。そして、アウグスト・バックもかれの著書『ヒューマニズム』¹の中で、「ローマ人は二重の意味で”最初のヒューマニスト”とみなすことができる。ローマ人はヒューマニズムに特徴的なギリシア精神を創造的に受容するとともに、“HUMANITAS”なる語を生み出した。・・・そして、ヨーロッパ・ヒューマニズムは、ローマを媒介として古代への接近を見出した」と述べ、ローマのもつ重要性を強調しました。それゆえ、ローマ・ヒューマニズムを生み出したローマ世界の歴史的意义が問われることになるでしょう。

ところで、古代教育史の研究分野は、古くはドイツのイエガーの古典的著作『パイデア』に代表される分野ですが、フランスのマルーなどの先駆的研究²が広く知られています。

ヒューマニズムの歴史と自由学芸の歴史

ヒューマニズムが意味する「人間らしい人間」の理想を古代ギリシアの「英雄像」に求めるとすれば、英雄とは「豎琴を奏で、朗々と歌いあげる英雄」像をイメージさせる文武に優れた人物であり、肉体と精神の一体化が前提条件となっています。つまり、英雄の理想像とは知力・体力・風格に優れている人物であり、「人間らしい人間」になるための条件とは、体育と音楽の重視であり、音楽は情操教育と知育教育に結びついていました。そして、「人間らしい人間」になるのに必要な「教養」とは、具体的には後の時代の自由学芸教育によって学習される知育教育でした。そして、「自由学芸」とは、「自由人が学ぶにふさわしい学芸」の意味であり、「自由人」とは紀元前5世紀のギリシアの自由市民にほかなりません。つまり、この教育観は、前5・4世紀のギリシアにおける「学ぶだけの余暇をもった自由市民たち」の教養の理想に起源があり、前450年から前350年までの「教育の世紀」の産物でした。

エンキュクリオス・パイデア(εγκύκλιος παιδεία)は通常は英語の general education 等いろいろな現代語³に訳されていますが、この語が「一般的教養」と呼ばれる時、この「一般的」とは

¹ August Buck, *Humanismus : Seine europäische Entwicklung in Dokumenten und Darstellungen*, München 1987.

² W. Jaeger, *Paideia, Die Formung der griechischen Menschen*, 1936.
A. Gwynn, *Roman Education from Cicero to Quintilian*, Oxford, 1926. H-I. Marrou, *Histoire de l'éducation dans l'antiquité*, Paris 1948. H-I. Marrou, *Saint Augustin et la fin de la culture antique*, Paris, 1937.

³ 現代語で the general education・la culture generale・die allgemeine Bildung と訳されている。

「通常の」とか「日常的な」の意味をもつのか、または「非専門的な」の意味をもつのが問題です。あるいは、「一般的」とは知識の空間的の広がり、つまり総合的知識、百科全書的博識を意味するのか、または知識の水準、つまり基礎的知識を意味するのも問題です。さらにまた、そもそもギリシア語のパイディアの語そのものが特定の専門学科を指すものではなかったのですから、なぜさらに重ねてエンキュリオスが付加されているのでしょうか。問題は、形容詞のエンキュリオスがいかなる意味で使われているかです。

この語の意味は、第1に「輪の中で」「円形の」、第2は「通常の」「日常的な」「一般におこなわれている」であります。この語は、第1の意味ではすでに前5世紀末に時折現われ、両方の意味では前4世紀以来しばしば登場し、その後の時代には主として第2の明らかに転化した意味で使われたようであります。たとえばアリストテレスは『政治学』の中でこの語を後者の意味で使っていることは広く知られています。そしてこの語がたどった歴史の変遷とエンキュリオス・パイディアの形成とは深い関連があります⁴。

プラトンが『国家』や『法律』で述べているように、初期ギリシアのパイディアが音楽=体育教育にあり、音楽と体育が歌舞の中に調和していたことはすでに知られている通りです。プラトンは、「歌舞の心得のない人」を「教育のない人」と呼んでおり、「教育のある人」とは「歌舞の訓練を積んだ人」であり、歌舞は踊りと歌から成り立っていますから、すぐれた教育を受けた人とは立派に歌い、踊ることができる人であることとなります。

数学的諸学の起源

ところで、4つの道を意味する Quadrivium(クワドリヴィウム)として数学的4学科を総括したのはポエティウスであり、Quadrivium という用語はポエティウス以前には見られません。Quadrivium の内容はイシドルスが『数学的諸学科』(disciplinae mathematicae あるいは mathematica scientia)と呼んだ数論・幾何学・音楽・天文学と同一であり、その名称が何であれ、ギリシア以来これら4学科が1つのまとまりとして総括されていたものと思われます。

また、ギリシアにおける自然研究の始祖を求めるとすれば、アリストテレスは『形而上学』でタレスの名を挙げており、またプロクロスも『エウクレイデス幾何学原論 第一巻注釈書』⁵において、タレスについて言及しています。また、ピュタゴラスの徒アルキュタスは、「数学者たちがこれらの数学的4科が姉妹関係にあることを教えてくれた」と述べています⁶。プラトンの『国家』

⁴ H.Koller, "εγκύκλιος παιδεία", Glotta, 1956. F.Kühnert, *Allgemeinbildung und Fachbildung in der Antike*, Berlin, 1961.

⁵ プロクロスはつぎのようにも述べている。「かれら(タレス、マメルコス、ヒッピアス)のほか、ピュタゴラスはかの学問(幾何学)を自由教養の一科目に転化させ、この学問の原理を上から考察し、諸定理を非物質的にしかも精神的に探求した」(Proclus, *In primum Euclidis Elementorum librum commentarii*, 65, 15. Friedl.: DK. 58 B 1)

⁶ ピュタゴラスの徒アルキュタスの報告「(数学者たちは)星々の速度や上昇や下降について、また幾何学や数〔数論〕や天球学〔天文学〕や、とくに音楽について明確な知識をわれわれに与えてくれた。なぜなら、これらの学問は姉妹関係にあるように思えるから」(Porphyr, in Ptolem. Harm. P. 56 Düring: DK. 47 B 1)

でも、ピュタゴラス派の説が引用されて、天文学と音楽が姉妹関係にあると述べられています。

ソフィストたちの教育の目的は、専門的技術を授けることではなく、一般的教養を授けることにありました。多くの学科を教えることができると主張したソフィストたちの多くは、四科をかれらの教授科目に含めていました。とりわけエリスのヒッピアスは四科の教育を強調しました。プラトンの『プロタゴラス』の中で、ヒッピアスは数論・天文学・幾何学・音楽を教授しています。ヒッピアスは数学研究の上でもギリシア数学史に記録されるほどの功績を残していますが、かれほどではないにしても、多くのソフィストたちもまたある程度は四科の研究に手を染めていたはずで

重要な点は、ソフィストたちが科学の進歩に寄与する重要な研究をおこなったか否かにあったのではなく、ヒッピアスがピュタゴラス派においては数学研究の対象であった四科の教育的価値を認め、はじめて学習カリキュラムに組み入れ、一部の哲学者や専門科学者たちの研究対象としてではなく、「一般教養科目」として採用したことにあります。

それと同時に、われわれはのちに Trivium(トリヴィウム)を形成する諸学科と、のちに Quadriviumを形成する諸学科とが早くから2つのグループに分けて考えられていたにしても、1つのグループに単にもう1つのグループを付け加えて全体としたにすぎないと思えるべきではないでしょう。2つのグループは補完的關係にあり、両者の統一を支えているのは普遍的教養の理想でありました。そして、いずれにしろわれわれは、ヒッピアスが自由学科の成立に向かった重要な一歩を踏み出したことを確認できますが、ヒッピアスが果たし得なかった仕事、つまり教育課程における四科の明確な位置づけはプラトンの登場を待たなければならなかったでしょう。

要するに、重要な点は、ソフィストたちが科学の進歩に寄与する重要な研究をおこなったか否かにあったのではなく、ヒッピアスがピュタゴラス派においては数学研究の対象であった四科の教育的価値を認め、はじめて学習カリキュラムに組み入れ、一部の哲学者や専門科学者たちの研究対象としてではなく、「一般教養科目」として採用したことにあります。

プラトンの教育計画

プラトンは数学史における輝かしい数学的業績を残してはいませんが、プラトンが黄金期のギリシア数学の第一級の数学的能力の持ち主であったことを考えると、『国家』で主張されている「教育カリキュラム」の意味は重要であります。プラトンは『国家』において、「計算術や幾何学は、哲学的問答法を学ぶために前もって必ず履修しなければならないもの」としており、エンキュリオス・パイディアはすでに「予備的教育」として使われています。さらに四科の基礎知識は、そもそも「人間であるためにも必要欠くべからざるもの」としています。そして、それらの教育的価値は単に実用的知識よりも、むしろいっそう高度な目標に向かう精神におよぼす効果のゆえに重要なのです。『国家』で論じられている数学的諸学とは、ヒッピアスの、さらにピュタゴラス派以来の4学科の結合を示しています。つまり、哲学をピラミッドの頂点とする教育体系において、四科は哲学の予備的学科として定着しました。

このように、プラトンとイソクラテスの対立は、ソフィスト運動から発した2つの教育体系、2つのピラミッドの対立であり、その後の哲学と修辞学の争いは必然的に 四科 の運命を支配することになりました。イソクラテスもまた 四科 を無視したわけではなく、それらが精神の鍛練になることを認めています。つまり、前4世紀初頭には、エンキュリオス・パイディアはすでに「予備的学科」として使われており、プラトンとイソクラテスが哲学者または演説家のためのそのような予備的学科に初めて言及し、以後西洋思想史上もっとも激しい戦いともみなされる『学問の王座をめぐる哲学と修辞学の闘争』が始まりました。そして、西洋史上に輝くクインティリアヌスの存在は、その後の歴史における修辞学の優位と哲学の後退を示しているとの解釈も可能かもしれません。

「教養」の変遷

以上のことからみて、自由学科の原初的形態の登場の時期は、前4世紀に求められるべきでしょう。なぜなら、前4世紀から前3世紀への転回期、すなわちアリストテレスの時代あるいはその直後には、エンキュリオス・パイディアがすでに教養体系として存在していたと想像できます。しかし、自由学科の原初的形態が前4世紀末にあらわれたとしても、それらは自由学科としてはまだ不完全なものでした。マルーは、最終的に中世が引き継ぐことになった自由学科が具体的に、そして明確に成立してくるのは前1世紀の中頃、すなわちディオニシウス・トラクス (Dionisius Thrax) とウァロ(Varro)の中間の時期であったと考えています。

ところで、中世の7学科を規定したとみなされる後5世紀のマルティアヌス・カペッラ (Martianus Capella)の著作『文献学とメルクリウスの結婚』(*De nuptiis Philologise et Mercurii*) は、古代ローマ末期の教育を反映したものであり、さらにこのカペッラが手本としたのはローマ共和制期のウァロの散逸した著作でありました。さらに、ウァロもまたヘレニズム世界に普及していた教育体系を受入にすぎないと考えられます。そして、その教育プログラムはそれ以前に形成されたものであったと想像されます。以上のことは、すでによく知られていることですが、我々は古代人が「教養」というものを具体的にどう考えていたかを確認する必要があるでしょう。

自由学科の内容は、その形成期から古代末期までの間にいかなる変遷をたどったのでしょうか。まず学科数の面で、自由学科はどのようにしてマルティアヌス・カペッラの7学科に定着していったのか、という大きな問題があります。マルーは諸学科に関する古代の著作家たちの証言を考察し、さらにキューネルトは古代の著作家たちの証言を一層詳細に検討し、その結果を第1表のように整理分類しています。「自由学科」に対する共通の観念が定着していない時期の証言を一律に分類することには疑問が残るとはいえ、われわれはマルーやキューネルトの分析を通じて、古代の著作家たちが学習の必要性を認めていた諸学科を概観することはできるでしょう。

第1表は、前4世紀のクセノクラテスから古代末期のアウグスティヌスまでの主要な著述家たちが指摘したものであります。この一覧表から受ける全体的な印象では、若干の例外はあるものの、全般的にはほぼ同じような学科名が挙げられていることでしょう。確かに学科名の不統一は

みられますし、学科数が少ない場合もあれば多い場合もあります。しかしキューネルトの一覧表の典拠となっている個々の著作に踏み込めば、当時の作家たちは自由学科について共通の観念を持っていたわけではないし、それぞれ明確なカリキュラムを想定していたわけでもなく、各人の執筆動機、目的も異なっていました。たとえばウィトルウィウスが建築学を、ガレーノス(Galenos)が医学を意識していたことを考えるならば、執筆目的の相違が異なった結果をもたらした事情もある程度は説明できるでしょう。

しかしながら全体的にみれば、古代の人々が高度の教養と考えていたものに算入されている諸学科には、特に予想外の学科があるわけでもありません。ウァロの 9 学科から建築学と医学が抜けてカペラの 7 学科になったということ、つまり、ローマ世界の全盛期を通過する過程で建築学と医学が脱落したことは、ローマ世界の特質とも関係する検討に値する重要な問題を含んでいると思われまます。

次に「教養」は人生のどの段階で学習すべきものであったかという問題があります。そしてここで連想されるのが、アリストテレスの有名な「人生 7 区分法」であります。つまり、人生を 7 歳・14 歳・21 歳と、7 歳ごとに区切る考え方でありまます。この説がどれだけ生理学的な根拠があるのかは私にはわかりまます。しかし、便利な説明ではありまます。つまり、7 歳は初等教育を始める時期であり、これは現代でも小学校入学年齢でありまます。軍事訓練ともいえる身体訓練の時期、いわゆるギリシアのエフェベイア(青年)は、18 歳ごろと推測されていまます。もしこの推測が正しいとすれば、14 歳から 18 歳ごろまでの時期が、人間が教養を身につけるのにふさわしい時期の中心であったことになりまます。つまり、この時期こそ人間の「精神形成」の時期であり、これ日本の教育制度に比較すると戦前の「旧制高校」であり、新制大学の「教養課程」に相当しまます。つまり、ギリシアで定着した「教養」は『人間形成』に不可欠なものでありまました。

Artes liberales への道

ごく大雑把な見方をすれば、確かに 7 学科の定着はマルティアヌス・カペラを待たなければならなかったにしても、ギリシア古典期から古代末期まで、ほぼ似かよった形が続いたと見ることもできるでしょう。そしてギリシアのエンキュクリオス・パイディアとローマのアルテス・リベラーレスとの間には、用語が変わったにもかかわらず、一つの教育体系の連続を指摘できるでしょう。それゆえ、マルーが指摘したように、ヘレニズム世界において一層具体的に成立した自由学科は、それを構成する諸学科の重大な変更を受けることもなくローマ世界に継承されたと考えられます。

グウィン⁷は、ローマの学校で正式に教えられた諸学科⁷の多くがギリシア名を最後まで保持したこと、しかも、そういった学科名はいずれもエンキュクリオス・パイディアの用語から直接借用

⁷ グウィン(Gwynn)は、ローマの学校で正式に教えられた学科の多くがギリシア名を最後まで保持したこと、grammaticae, rhetorice, musice, mathesis, geometres, rhetor, philosophus といった用語はいずれも ἐγκύκλιος παιδεία から借用されたものであると主張している。

されたものであったことを指摘しています。そしてクインティリアヌスもその種の用語のほとんどがそれらに相当するラテン語をもっていなかった、と述べており、さらにキケロは、ローマ人は哲学やすべての自由学科をギリシア人から引き継いだ、とはっきり語っています。

自由学科を示す *Artes liberales*(アルテス・リベラーレス)はすでに古代ローマ人によって使用されていましたが、このラテン語に相当するギリシア語は、今まで見てきたように、エンキュクリオス・パイディアであったと考えられます。それゆえ、「自由学科」のギリシア的理解からローマ的理解への道は、エンキュクリオス・パイディアからアルテス・リベラーレスへの過程でありました。

Artes liberales という用語に古代で最初に出会うのは、キケロの初期の著作『構想論』においてであります⁸。このことは、早くも前1世紀初頭において *Artes liberales* が用語としてすでに確立していたことを示唆するものであります。ところがキケロは『雄弁家論』の中では、この語を避け、代わりにいくつかの表現、なかにはいかにもローマ的な用語も使っています。また『最高の善と悪について』には、別な表現もみられます⁹。しかしこれらの表現はほぼ同じ内容を意味していると考えられるので、その後の歴史が示しているように *Artes liberales* が次第に一般的となっていくと考えることができます。

セネカは、「ギリシア人がエンキュクリオスと呼び、一方われわれローマ人はリベラーレスと呼ぶ諸学科」¹⁰と述べており、クインティリアヌスもまたそれらの学科をギリシア人がエンキュクリオス・パイディアと呼んでいることを指摘しています。これらの明確な証言は *Artes liberales* に相当するギリシア語がエンキュクリオス・パイディアであったことを示唆しています。しかし、逆に、エンキュクリオス・パイディアに正確に相当するラテン語は存在しません。ウィトルウィウス (Vitruvius) は、半分ギリシア語半分ラテン語の奇妙な用語である *encyclios disciplina* を使っていますが、これでは翻訳語にはなりません¹¹。

このようなギリシア語のエンキュクリオス・パイディアがラテン語の形をとっている表現は、マルティアヌス・カペッラにもみられます¹²。それゆえ、エンキュクリオス・パイディアと *artes liberales* とがそれぞれそれに相当する語をほかに持たないとすれば、前者に相当する語は後者しかないということになるでしょう。つまり前述のセネカやクインティリアヌスの証言にも見られるように、これら二つの語は同一のことを意味しており、内容的に一致すると考えられます。

⁸ Cicero: *De Inventione*

(1) *eruditio libero digna*

(2) *artes, quae sunt libero dignae*

(3) *artes ingenuae*

(4) *liberales doctrinae atque ingenuae*

(5) *bonae artes*

⁹ *artes elegantes et ingenuae*

¹⁰ Seneca, Ep. 88. 23: *Hae artes quas qui ἐγκυκλίους Graeci, nostri autem liberales vocant.*

¹¹ Vitruvius: *encyclios disciplina*

¹² Martianus Capella: *disciplinas encyclicas*

自由学科の展開

自由学科の観念は、成立したばかりの時期には、それがまだ枠組みが揺れ動きやすく、哲学的色彩を拭いさってはいないにしても、四科のその後の流れにに重大な影響を及ぼすことになりました。四科は、当然のことながら自由学科として安定した場を与えられましたが、同時に制約をうけることにもなりました。く四科は自由学科として重んじられ、その教育は継続したとみることができます。少なくとも、教養としての四科の価値を否定する敵対的な教育体系は出現しなかったことだけはあきらかであります。

ヘレニズム時代からローマ時代にかけて、学問の王座をめぐる哲学と修辞学の争いは激しさを増していきました。だが、四科は両者の覇権争いに自ら参加することはありませんでした。その間、修辞学がひたすら上昇傾向をたどり、哲学を頂点とする教育体系と修辞学を頂点とする教育体系との対立において哲学が後退したことは、歴史的にも哲学との結びつきが深い四科にとって不利なものであり、四科の自由学科内部での地盤沈下は避けられませんでした。アリストテレスとペリパトス学派の歴史的研究やヘレニズム時代の科学書は、ソクラテス以前の哲学あるいはタレスやピュタゴラス、さらにかれらに続く世代のギリシア科学の全盛期の業績を伝達することでそれに応えています。そして何よりも便覧類の流行と「文学の科学への侵犯」は、それらの人気に支えられていました。多くの人びとは古典にあらわれる数学的知識をもはや理解できなくなっていました。しばしば指摘されるように、ローマ人のすぐれた自然科学者はいませんし、キケロも述べているようにすぐれたラテン語数学書は書かれませんでした。多くの近代の科学史家たちが古代最高の天才の科学者の一人と評価するアルキメデス(Archimedes)をヴィトルヴィウス(Vitruvius)は正確に理解していたとは思えません。そして、たとえクインティリアヌス(Quintilianus)が「四科」教育の必要性を認めていたにしても、我々は彼の数学力を評価するわけにはいかないでしょう。しかし、それにもかかわらず、プラトンの精神は、クインティリアヌスのなかに継承されています。『建築書』の著者であるヴィトルヴィウスは実際にどんな建築に従事したのか詳しくは伝えられていません。有名な『医学書』の著者であるケルスス(Celsus)も、臨床医師としても医学者としても高くは評価されないでしょう。ローマ文化を支配していたのは、「ラテン語百科全書の著述家」の精神でした。そして、アラトス(Aratos)の人気も、中等教育における四科の危機と無関係ではないでしょう。

ローマ帝政期にタキトウスが取り組んだいわゆる「雄弁術の衰退」問題は、キケロの時代からいかに修辞学が変わってしまったかを物語っていますし、キケロ以降のローマ人のギリシア語力は衰えを見せ、ローマ世界におけるギリシア文化の影響は、キケロ以後低下傾向をたどりました。古代末期に、ギリシア文化を最もよく理解していた人物の一人がイングランドのベダ(Beda)ではないだろうか、いう極端な意見さえも聞くことができますが、このことはまさにローマ世界における『ギリシアの運命』を暗示しているでしょうが、同時に、新たに展開したローマ世界を暗示してもいるでしょう。

第 表 古代人が「教養」と想定している学科構成

クセノクラテス	文法			音楽		幾何学	天文学	
アルケシラオス	文法 / 詩	弁証法	修辞学	音楽	数学的諸学科			
メネクレス	文法	哲学		音楽		幾何学		医学・体育・絵画
キケロ	文学	弁証法	修辞学	音楽	数論	幾何学	天文学	
ウァロ	文法	弁証法	修辞学	音楽	数論	幾何学	天文学	医学・建築学
ウィトルウィウス	文法	哲学	修辞学	音楽	数論	幾何学	天文学	医学・製図・法学
ニコラオス(ダマスクの)	文法 / 詩	(哲学)	修辞学	音楽	数学的諸学科			
フィロン (アレクサンドレイアの)	文法	弁証法	修辞学	音楽	数論	幾何学	天文学	
〔ケベス〕	文法 / 詩	弁証法	修辞学	音楽	数論	幾何学	天文学	
セネカ(哲学者)	文法			音楽	数論	幾何学	天文学	
プルタルコス	文法		修辞学	音楽		幾何学		
クインティリアヌス	文法			音楽	数論	幾何学	天文学	
アプレイウス	文法 / 詩	弁証法 (哲学)	修辞学	音楽		幾何学		
マクシモス(テュロスの)	詩	(哲学)	修辞学	音楽	数論	幾何学		体育
セクストゥス・エンピリクス	文法	(哲学)	修辞学	音楽	数論	幾何学	天文学	
ガレノス	文法	(哲学)	修辞学	音楽	数論	幾何学	天文学	医学・法学
クレメンス (アレクサンドレイアの)	文法	弁証法	修辞学	音楽	数論	幾何学	天文学	
オリゲネス	文法		修辞学	音楽		幾何学	天文学	
パルフェリオス	文法	哲学	修辞学	音楽	数論	幾何学	天文学	
アナトリオス	文法	弁証法	修辞学		数論	幾何学	天文学	
ラクタンティウス	文法		修辞学	音楽		幾何学	天文学	
グレゴリウス (ナツィアンツの)	文法	(哲学)	修辞学		数論	幾何学	天文学	
ヒエロニムス	文法	弁証法 (哲学)	修辞学	音楽		幾何学	天文学	医学
アウグスティヌス	文法	弁証法	修辞学	音楽	数論	幾何学	天文学	